



2014 **12** December

SUN	MON	TUE	WED	THU	FRI	SAT
31	1	2	3	4	5	6
7	8	9	10	11	12	13
14	15	16	17	18	19	20
21	22	23	24	25	26	27
28	29	30	31	1	2	3

「折角の聖夜祭だ。
願ひ事の一つでも、祈って見たらどうだ？」
頭上には満点の星明かり。
眼下には人の家々に灯る優しい街明かり。
二つの光源に輪郭を彩られながら、レオンが
面白がるように言葉を落とした。
「うーん……月並みですけど、
この先もずっとレオンさんと居られますように、かな。
レオンさんは、どうですか？」
「俺か？ そうだな……
俺は、毎日アンタの焼いたドクニジマスが食べたい、だな」
頼んだぞ、と悪戯っぽく口角を上げるレオンに、
もう、と吐いたフレイの溜め息が夜空に浮かぶ。
「年に一度のお祭りなのに、そんなお願いでいいんですか？」
ふく、と可愛らしく膨れた頬をレオンの指がつつくと、
その手はそのままフレイの掌へと重なった。
「良いんだよ、どんな願ひ事でも。
……俺の一番の願ひならもう、アンタが祈ってくれたからな。
だから、俺が望むのは毎日の飯の内容と——
こうして、アンタとずっと手を繋いでいることぐらいだ」

Illustration : マ SSS : Judah